鳥十夜

箱ねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鳥十夜

【Ｎコード】
Ｎ５５２０Ｗ

【作者名】
箱ねこ

【あらすじ】
夏目漱石『夢十夜』のオマージュである井上雅彦『花十夜』のオマージュ。
所属していた文芸サークルの雑誌で一度発表してます。
（ｎｏｖｅｌｉｓｔの方でも掲載）

第一夜　黒鶫

……こんな鳥を見た。

食卓とピアノがある。私は白いテーブルクロスのかかった食卓に一人腰かけていた。ピアノの前にも誰かが座っているが此方からでは顔が見えない。見えるのは彼の（彼女かもしれない）手元だけだ。

草の根のように細く長い指が、滑るように鍵盤の上を動く。緩やかなのに気忙しい、ひどく不快な不協和音。猛禽類の鍵爪で脳を引っ掛かれるようだ。しかしこれも音楽。知っている、確かタイトルは黒鶫。

私の目の前の、食卓にただ一つ置かれた料理。小さなパイの中から黄色い嘴が芽吹いたかと思うとたちまちに狐色に焼かれた生地を突き破って小さな鳥が飛び出す。知っている、確か名前は黒鶫。

音楽に合わせて黒鶫は小さなパイの中から次々と現れる。音楽が終わりこの小さな鳥達が全部出て来るまで、私はパイをつつけない。

第二夜　鳩

……こんな鳥を見た。

「家ばと、山ばと、小鳥さん、いい豆は、お鍋の中へ。悪いのは、お腹の中へ」

大丈夫、全部引き受けてあげるわ。母さんはあなたが本当は悪い子じゃないって知ってるもの。ちゃあんといい子になれるのよ。悪いことをしてしまったら、ほら、母さんがあなたの悪いところを全部つついて抉って食べてあげる。そうすれば、いいところしか残ら

ない。あなたはいい子になる。
ね、だから大丈夫。悪いのは、お腹の中へ。
あなたの悪いところは、母さんのお腹の中へ。
――あらいやだ、あなたは根っからの悪い子だったのね。
だってほら、もう骨も残らない。みぃんな母さんのお腹の中に。

第三夜　鶏

……こんな鳥を見た。
あれを取って来てと言われたので取りに行こうと歩き出す。
三歩進んだところで何を頼まれたのか忘れてしまい戻って聞きなおそうと思うが三歩戻るとなぜ戻って来たのかわからなくなり進んでみればわかるかと三歩進みそこでなぜ歩いて来たのかどうにもわからず三歩戻るとどうして自分はここに来たのだろうと思い三歩進んでみて何しに来たのだ元の場所に帰ろうと三歩戻ってここはどこだと三歩進み訳がわからず三歩戻り私は誰だろうと三歩進み永遠に行ったり来たり。

第四夜　嵐ヶ鳥

……こんな鳥を見た。
彼女は歯で噛み切った枕の裂け目から一枚一枚羽を引き摺り出す。
私は遠くから見ている。
「それは七面鳥の羽毛」
彼女はその羽をベッドの敷布の上に並べて分類している。
「これは野鴨ので、これが鳩の」
彼女の頬はふっくらとしていて薔薇色で、きっと甘い味がするだろう。

「ここにあるのは雷鳥の羽で、これは田鳧のもの。かわいい鳥。沢原の真ん中で私たちの頭の上を舞っていったっけ。きっと巣に帰りたかったのね」
田鳧――決して撃たないと約束した。忘れていない。
彼女は尚も羽を並べる。
「これは私の。同じ色だけど少し違う、これはあなたの」
君にも私にも羽は生えていないと私は言う。しばらくして私の声は漸く届き、彼女が答える。
「いいえ、羽は生えたのよ。ヒースの繁みで、私はあなたが落ちて来るのを待ってたわ。あなたは漸く落ちてきた」
――彼女の声は私に向けるときだけ、ひどく聞き取りづらい。
「襤褸い牢屋みたいな体から逃れて、私は輝く世界に行くの」
落下する。彼女がだんだん近くなる。
「あなたも一緒よ、今度こそ。だって私達、漸く同じ土の下だもの」
最後の言葉はやけにはっきりと聞こえ、私はなんだか嬉しくなった。確かに、羽は生えていた。

第五夜　蜜鳥

……こんな鳥を見た。
君は文字通り花の顔。右半分が赤いハイビスカスのように咲き誇って美しい。勿論普通の人間の様にはいかないが、美しいものは美しい。君にハイビスカスを咲かせたのは私なのだが。
ぶぶぶぶ、ぶ、と寄ってくる。蜂のように細かく羽を震わせて飛ぶ鳥が、何匹も。
蜜鳥は垂直に動き回りながら君の顔をつついて長い嘴で蜜を吸う。

第六夜　十姉妹

……こんな鳥を見た。
鞠をつくように、卵をついている。子供の小さな手には少し大きな赤い卵。ゴムでできているかのようによく弾み、金や銀の糸が張り巡らされたような煌く模様がついていて、見た目は殆ど鞠と変わらない。だが私は、これが卵だと知っている。
何の卵だったのか、懸命に思い出す。思い出しながらも卵つきの手は休めない。
ぴしり。卵に皹が入る。ぴしり。記憶にも皹が入る。
思い出した。これは、鳥になって行った姉さまの卵。
卵が割れて、宝石のように殻を散らしながら、中から、殻と同じ模様の振袖を着た、小さな小さな黒髪の少女が現れる。
私は少女を抱き上げた。
「こんにちは、姉さま」
もうじき私は七つ。鳥になるまであと三年と少し。
「今度は、私が姉さまになる番ね」

第七夜　姑獲鳥

……こんな鳥を見た。
頭上を舞う巨大な怪鳥。時折悲しげに、悲痛な悲鳴を上げている。
あれは本当に鳥だろうか。低く旋回する巨体は、羽が生えているが上半身は女のそれだ。
さては。
「母さん」
私は呼びかける。鳥は一声、高く叫び、その瞬間私は見た。振り乱された長い黒髪と、二つの乳房の間を裂いてこちらを覗く、血塗れた赤ん坊の顔を。

第八夜　雁

……こんな鳥を見た。

春に行き、夏に積み上げ秋に帰る。

それが向かうのは海の向こう、終わらない薄闇の、常夜の国。

それが咥えているのは、細く裂かれた私の骨だ。

骨を咥えて春に行き、夏に積み上げ秋に帰る。冬には次の破片を咥えて、再び春に行く。

一つ一つ、細く裂かれた私の骨を、常夜の国に積み上げる。もう何遍も繰り返した。一体私の墓標はいつ完成するのだろう。

第九夜　鵞鳥

……こんな鳥を見た。

私は狭いところに詰め込まれていて、身動きを取ることができない。

私の目の前、胸から上の部分だけは四角く壁が切り取られていて、窓のようになっている。そこへ、私と殆ど背丈の変わらない、異様に大きな鵞鳥がやってくる。鵞鳥は腕に巨大なアルミの器を抱えている。器の中身は山盛りのトウモロコシ、もう片方の手には銀の匙。鵞鳥は匙を器に突っ込み、トウモロコシを掬って私の口元に差し出す。私は口をあけた。半ば無理やりに詰め込まれた飼料を飲み込むと、次の一口。その次の一口。その次。その次。次々とトウモロコシを食べさせられる。器が空になると、別の鵞鳥がトウモロコシで満たされた新しい器を運んで来る。私はこんなに食べているのに、どうしてだか満たされず、空腹ばかり感じるので差し出されるトウモロコシをすべて飲み込む。もう、器に盛られたトウモロコシを何杯食べたかわからない。それでも空腹は増すばかり。空腹どころか

飢餓まで感じる。満たされない。体もどんどん痩せ細っていく。それを訴えると鵞鳥は匙を運ぶ手を止め、腹に手を突っ込んで自分自身の肝臓を取り出す。

「なら、これをお食べ」

脂と血にまみれた鵞鳥の肝臓を食べると、枯れ木のようになってきていた私の体は忽ちぶくぶくと太りだす。鵞鳥はもうトウモロコシを食べさせない。私の体は太り続ける。部屋に収まらないくらいまで膨張し、壁を壊しても膨らみ続け、やがて私はポップコーンのようにはじけた。

第十夜　ねじまき鳥

薄紫の夜空の下で、線路の向こう側の満開の桜は大量の羽虫が一箇所に集まって蠢いているように見える。地面に張り付いた花びらは潰れた蛆虫に違いない。

花と私を、線路を駆け抜ける電車が断絶する。

現在、午前二時。だからこの電車の中身は全部死人なのだろう。

電車が通り過ぎ、もっと近くで桜の花をと線路に立ち入る私を、戻ってきた電車がひき潰した――そう思った瞬間、私はエンジンの重低音が響く飛行機の中にいる。あの線路は、滑走路だったのか。

そこでは洋服を着た、様々な巨大化した鳥が思い思いの格好で寛いでいた。その中の一匹が言う。

……こんな鳥を見た。

丸く切り取られた窓の下に広がるのは、雲か桜か虫の群れか。

……こんな鳥を見た。

窓ガラスに映る私自身も、いつの間にか鳥の姿をしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5520w/

鳥十夜

2011年9月10日03時23分発行